

なすかしの森 セカンドスクール2025



教育事業 報告書



独立行政法人 国立青少年教育振興機構
国立那須甲子青少年自然の家

1 事業の概要

(1)趣旨

「なすかしの森セカンドスクール」は、参加児童のみならず教員・保護者・大学生（教育支援スタッフ）・施設職員が相互に学び合う機会となることを目指す。

- ①児童は、自然の家が有する教育環境を生かした自然体験活動や生活体験活動に取り組むことで、自己理解・他者理解を深めていく。また、様々な人々との協働を通して、「自分らしさ」「役に立っている」「やればできる」などの自己肯定感を高めていく機会とする。
- ②教職員は、自然の家の教育環境・教育資源を活用した教育活動を実施することで、自然体験活動の指導に必要な基礎的な知識や技術を習得し、実践力を高めていく。また、学校外での子供の姿を見取り、児童理解を深めていく。
- ③保護者は、長期間子供と離れて過ごすことで、子供への愛情の再確認や子育てについて内省する機会とする。また、セカンドスクール後、子供と向き合い、会話を重ねる中で、子供の成長や変化に気付くきっかけとする。
- ④大学生は、教育支援スタッフを通して主体的・自主的に児童と関わることで、学校教育・社会教育の理解を深める。
- ⑤施設職員は、集団宿泊活動の教育効果が高まるように企画運営を行うとともに、学校教育や児童への理解を深め、適切に支援を行う力を高めていく機会とする。

(2)参加学校、参加人数と期間

西郷村5校、棚倉町2校、計7校の小学5・6年生、計226名の児童が、令和7年10月中に当施設を利用して、4泊5日又は3泊4日の日程で参加した。

表1 参加校と人数一覧

実施期間	参加校	学級数	人数
10月6日(月)～10日(金)	西郷村立小田倉小学校5年生	2学級	65名
10月20日(月)～24日(金)	西郷村立米小学校5年生	1学級	33名
10月20日(月)～24日(金)	棚倉町立近津小学校5年生	1学級	15名
10月21日(火)～24日(金)	棚倉町立社川小学校5年生	1学級	26名
10月27日(月)～31日(金)	西郷村立熊倉小学校5年生	2学級	73名
10月27日(月)～31日(金)	西郷村立羽太小学校5年生	1学級	4名
10月27日(月)～31日(金)	西郷村立川谷小学校5年生	1学級	10名

表2 時間割の例（西郷村立米小学校）

2 事業の実際

3校同時開催したプログラム

- ・ポッチャ
- ・野外炊事（カレー作り）
- ・焼き板
- ・なすかしの森トレッキング
- ・ナイトハイキング
- ・キャンプファイヤー準備
- ・キャンプファイヤー



図1 オリエンテーリングの様子



図2 キャンプファイヤーの様子

時刻	区分	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
6:30	なすかし タイム		起床・清掃	起床・清掃	起床・清掃	起床・清掃
7:00			朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい	朝のつどい
7:20		学校出発予定 8:30 入所	朝食	朝食	朝食	朝食
8:15		9:00	引き継ぎ	引き継ぎ	引き継ぎ	引き継ぎ
8:45	スクール タイム	朝の会	朝の会	朝の会	朝の会	朝の会
9:00		1校時 書写 「手紙の書き方」				1校時 道徳 通所点検 清掃活動
9:45		2校時 学活 「出会いのつどい」	2校時 総合 「絵はがき作り」	1～4校時 家庭科 「食べて元気」 ポッチャ体験 野外炊事カレー	1～4校時 理科 「流れる水の はたらき」 なすかしの森 トレッキング	2校時 国語科 「秋の夕」
10:35		3校時 総合 自然の家 ココロコ	3・4校時 体育科 ポッチャ体験			4校時 総合 「活動を振り返ろう」 アンケート
11:25		4校時 国語科 「好きな詩のよさを 伝えよう」				5校時 学活 「別れのつどい」
12:15		昼食 昼休み	昼食 昼休み			昼食 昼休み
13:45		5校時 道徳 「ルール・マナー」 ベッド メイキング	5校時 社会科 「わたしたちの 生活と森林」 「オリエン テーリング」 荒天時 ニュースゴーツ 「タグラグビー」	5校時 理科 振り返り	13:30～ 帰校	
14:30		6校時 算数科 「平均」	5・6校時 図画工作科 焼き板	6校時 総合 「キャンプファイ ヤーの準備」		
14:35		帰りの会	帰りの会	帰りの会	帰りの会	
15:25		引き継ぎ	引き継ぎ	引き継ぎ	引き継ぎ	
15:30		タベのつどい	タベのつどい	タベのつどい	タベのつどい	
15:45		夕食	夕食	夕食	夕食	
16:45		なすかし タイム	計画立案	ナイトハイキング	キャンプファイヤー練習	キャンプファイヤー
17:10			入浴	入浴	入浴	入浴
18:00	入浴		入浴	入浴	入浴	
20:00	入浴		入浴	入浴	入浴	
21:00		就寝	就寝	就寝	就寝	

3 意識調査

(1) 児童の学び

【調査方法】

「自己肯定感」「主体的に他者と関わり協働する姿」の変容を調査した。調査方法としては、各校の初日（事業前）と最終日（事業後）に質問紙調査を実施し、更に追跡調査として、約1か月後にそれぞれの学校にて調査を行った。事業前・事業後は、調査実施者から文書及び口頭で説明を行い、本調査への協力を依頼した。追跡調査は、各学校で教職員が実施者となり調査を行った。その結果、188人から回答を得た。

【質問紙】

「自己肯定感」については、国立青少年教育振興機構が実施した「青少年の体験活動等に関する意識調査（2022）」¹⁾、「主体性・協働性」については、河村（2020）が作成した「中学生における主体的学習態度尺度」²⁾の2つの下位尺度を用い、同一調査を3回行った。

「自己肯定感」については、3つの質問項目、「今の自分が好きだ」「自分には、自分らしさがある」「自分には、長所（よいところ）がある」を設けた。回答は、「全く思わない」「あまり思わない」「少し思う」「とても思う」の4件法で求めた。また、自由記述で詳しい回答を求めた。

「主体性・協働性」については、10の質問項目を設け、回答は、「全く思わない」「あまり思わない」「どちらともいえない」「少し思う」「とても思う」の5件法にて求めた。本項目は、中学生用に作成されているため、小学生でも回答できるよう、1項目のみ説明を補足して実施した。

フェイスシート情報として、クラス、番号、氏名を記入してもらった。

【結果】

「自己肯定感」については、「全く思わない」を1点、「あまり思わない」を2点、「少し思う」を3点、「とても思う」を4点として集計分析を行った。

「主体性・協働性」については、「全く思わない」を1点、「あまり思わない」を2点、「どちらともいえない」

を3点、「少し思う」を4点、「とても思う」を5点として集計分析を行った。

また、「事業前」「事業後」「追跡調査時」に記述式の調査を実施し、多く用いられていた語（以下、「頻出語」という）の抽出を行った（なお、本調査では、5回以上用いられた語を主に頻出語とした）。

表3 児童の育ちの事前・事後・追跡の比較

尺度	測定時期	平均	標準偏差
自己肯定感	事前	3.21	0.40
	事後	3.38	0.39
	追跡	3.32	0.36
主体性・協働性	事前	3.85	0.40
	事後	4.01	0.51
	追跡	4.02	0.45

表4 自己肯定感の事業前・事業後・追跡の平均値

質問内容	事業前		事業後		追跡	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1.今の自分が好きだ	3.07	0.78	3.29	0.77	3.24	0.76
2.自分には、自分らしさがある	3.29	0.73	3.49	0.67	3.39	0.65
3.自分には長所(よいところ)がある	3.25	0.74	3.35	0.77	3.33	0.72

○自己肯定感

表3から、事業前後にかけて、自己肯定感の数値が、0.17上昇し、また追跡でも事業前と比べて、数値が0.11上昇していることが分かる。

特に、表4「1.今の自分が好きだ」が事業前後で数値の上昇が0.22と大きく、事業後から追跡の数値の変化は、0.05と小さい。事業前と追跡では、0.17と、3項目の中で一番上昇している。

○主体性・協働性

表3及び表5から、事業を通して主体性・協働性の数値が、向上したことが分かる。事業前後では、0.16上昇、事業後と追跡時では、0.009更に上昇している。

特に「5.積極的に取り組んでいる」が0.39上昇と伸びが大きく、「1.自分で決めてやろうとしている」「3.自分の考えを持っている」がそれぞれ0.25上昇している。また、事業後の数値を維持している項目が多い。

表5 主体性・協働性の事前・事後・追跡の平均値

質問内容	事業前		事業後		追跡	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1.他の人に指示されてから行うよりも、自分で決めてやろうとしている。	3.61	0.92	3.86	0.99	3.81	0.88
2.ペアやグループでの話し合い活動では、自分の意見を言うようにしている。	3.85	0.98	3.98	1.00	4.04	0.92
3.授業などで発言する時間や場面でなくても、自分の考えを持っている。(持つようにしている。)	3.81	0.89	4.06	0.90	4.05	0.88
4.他の人と違う意見であっても、自分の意見を言っている。	3.62	1.11	3.70	1.07	3.71	1.10
5.物事に対して積極的に取り組んでいる。	3.89	0.95	4.21	0.93	4.16	0.87
6.活動するとき、友達と協力して取り組むようにしている。	4.44	0.73	4.48	0.73	4.48	0.70
7.友達の考えが自分の考えと違ってもすぐに否定しないで、よさを見つけようとしている。	3.95	0.89	4.04	0.89	4.05	0.91
8.話し合いの場面では個人の利益を優先するのではなく、みんなの幸せが実現するやり方を探したり、意見を出そうとしている。	3.87	0.89	4.03	0.94	4.06	0.91
9.みんなの意見をもとに、さらに新しいやり方や考え方を創りだそうとしている。	3.63	0.97	3.83	0.98	3.84	0.91
10.友達の意見を取り入れ、自分の考えを発展させている。	3.83	0.96	3.91	0.98	3.98	0.93

表6-1 セカンドスクールでの新たな気づき

質問内容	はい		いいえ	
	割合	割合	割合	割合
1.セカンドスクールで新たに自分の好きなどころを見つけることができましたか。	66.4%	33.6%		
2.セカンドスクールで新たに気づけた自分らしさがありましたか。	53.2%	46.8%		
3.セカンドスクールで新たに気づけた自分の長所(よいところ)がありましたか。	59.7%	40.3%		



図3 食事の様子

<セカンドスクールでの気付きについて>

表 6-1 から、事業後のアンケート「セカンドスクールで新たに見つけた/気付けた点」から、特に「自分の好きなどところを見つけた」が 66.4%と高いことが分かる。

抽出語	出現回数
自分	21
友だち	21
人	19
協力	18
仲良く	14
好き	13
行動	10
声	10
見つける	6
困る	6
挑戦	6
たくさん	5
進む	5
優しい	5

抽出語	出現回数
自分	25
友だち	15
人	13
優しい	9
協力	8
元気	6
たくさん	5
意見	5
気	5

抽出語	出現回数
人	25
協力	20
友だち	13
優しい	10
自分	9
声	7
元気	5



図4 なすかしの森トレッキングの様子



図5 清掃の様子

各項目の回答で特に多かったもの (表 6-2、6-3、6-4 より)

「見つけた自分の好きなどところ」

- ・友だちと協力できる/友だちに自分から声をかけられる/手助けができる
- ・みんなと仲良くできる/他校の児童と仲良くできる
- ・自分でできた/自分から進んでできた

「気づけた自分らしさ」

- ・友だちと仲良くなれる/協力できる/大切にする/一緒に泣ける/気持ちを考えられる
- ・自分の意見を言える/人の意見を聞ける/人の意見に流されない/積極的に発言する/みんなをまとめる

「気づけた長所(よいところ)」

- ・仲間や友だちと協力できる/優しいところ/友だちを支えてあげた/友だちの話を聞ける
- ・自分なりに考えて案を出せる/前向きに考える/友だちの気持ちを考えて行動できる/周りを見て行動できる
- ・人を笑わせて元気にさせる/困っている人を放っておけない/困っている人を助ける

※あわせて「自分らしさ」「長所(よいところ)」については、セカンドスクールのどのような機会にそう感じたかをアンケートで尋ねた。「野外炊事」や「キャンプファイヤー」等の活動に加え、食事・入浴や宿泊室で過ごしているとき等の生活面での気付きについて回答する児童も多かった。

<自己肯定感に関する意識の変容について>

事業前と追跡調査時で、自己肯定感について自己評価が高い(「少し思う」「とても思う」)児童と自己評価の低い(「全く思わない」「あまり思わない」)児童に対して理由を記述させ、事業前・追跡調査時それぞれで頻出語を抽出し、その比較を行った。

「1. 今の自分が好きだ」の高評価の理由の比較(事業前-追跡) (表 7-1、7-2)

【共通事項】

「友だち」に「優しく」/「仲良く」している/いつも「元気」/「自分」の性格やできること

【事業前後の変化】

人と「笑顔」で関わっている/人を「笑顔」にさせている

「1. 今の自分が好きだ」の低評価の理由の比較(事業前-追跡) (表 7-3、7-4)

【共通事項】

「好き」なところがない、「思わ」ない/～が「悪い」

【事業前後の変化】

「注意」される/「注意」されても～/強く「注意」してしまう

「2. 自分には自分らしさがある」の高評価の理由の比較(事業前-追跡) (表 8-1、8-2)

【共通事項】

「自分」の性格/「自分」と他者の違い/「友だち」を大切にする・助ける・心配する/「好き」なこと

【事業前後の変化】

自分の「意見」や思ったこと「言える」/「優しい」ところ

「2. 自分には自分らしさがある」の低評価の理由の比較(事業前-追跡) (表 8-3、8-4)

【共通事項】

「思い」つかない/「分から」ない/「考え」たことがない

【事業前後の変化】

回答の大きな変化は見られなかった。

「3. 自分には長所(よいところ)がある」の高評価の理由の比較(事業前-追跡調査時) (表 9-1、9-2)

【共通事項】

「友だち」に優しくする・助ける・仲良くできる/「元気」なところ

【事業前後の変化】

人の「話」をよく「聞く」/「思いやり」がある

「3. 自分には長所(よいところ)がある」の低評価の理由の比較(事業前-追跡調査時) (表 9-3、9-4)

【共通事項】

「思い」つかない/「分から」ない/「思いつか」ない

【事業前後の変化】

回答の大きな変化は見られなかった。

表7-1 事業前「今の自分が好きだ」
高評価理由の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
友だち	30	楽しい	7	足	5
自分	26	言う	7	速い	5
人	20	得意	7	仲良く	5
優しい	20	助ける	6	挑戦	5
感じる	17	たくさん	5	勉強	5
好き	16	意見	5	明るい	5
思う	13	行動	5	話せる	5
元気	12	困る	5		
学校	7	素直	5		

表7-2 追跡「今の自分が好きだ」
高評価理由の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
自分	38	笑顔	9
友だち	38	言う	8
人	27	たくさん	6
優しい	27	速い	6
好き	20	面白い	6
元気	11	遊ぶ	6
思う	11	助ける	5
感じる	10	足	5
困る	9		

表8-3 事業前「今の自分が好きだ」
低評価理由の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
好き	11	性格	4
自分	11	少し	3
悪い	5	勉強	3
思う	4	友だち	3

表7-4 追跡「今の自分が好きだ」
低評価理由の抽出語

抽出語	出現回数
好き	4
自分	3
注意	3

表8-1 事業前「自分には、自分らしさがある」
高評価理由の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
自分	30	得意	7	たくさん	5
友だち	26	いつ	7	ゲーム	5
人	20	元気	7	スポーツ	5
感じる	20	個性	6	ダンス	5
好き	17	他	5	運動	5
違う	16	大好き	5	楽しい	5
絵	13	分かる	5	言う	5
思う	12	優しい	5		
行動	7	遊ぶ	5		

表8-2 追跡「自分には、自分らしさがある」
高評価理由の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
自分	38	いつ	7	他	5
人	30	意見	7	得意	5
友だち	18	言う	7		
好き	17	たくさん	6		
思う	14	絵	6		
優しい	14	話す	6		
元気	13	言える	5		
違う	11	笑顔	5		
感じる	11	速い	5		

表8-3 事業前「自分には、自分らしさがある」
低評価理由の抽出語

抽出語	出現回数
自分	10
思う	5
考える	4
分かる	3

表8-4 追跡「自分には、自分らしさがある」
低評価理由の抽出語

抽出語	出現回数
自分	6

表9-1 事業前「自分には長所(よいところ)がある」
高評価理由の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
友だち	37	仲良く	10	明るい	6
優しい	32	得意	8	あいさつ	5
人	30	スポーツ	7	家族	5
思う	17	長所	7	絵	5
困る	13	勉強	7	先生	5
助ける	12	感じる	6	挑戦	5
元気	11	協力	6	遊ぶ	5
自分	11	足	6		
言う	10	速い	6		

表9-2 追跡「自分には長所(よいところ)がある」
高評価理由の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
友だち	36	自分	9	遊ぶ	5
人	35	仲良く	9		
優しい	33	足	6		
助ける	15	速い	6		
元気	12	話	6		
言う	12	行動	5		
困る	10	思いやり	5		
思う	10	上手い	5		
感じる	9	聞く	5		

表9-3 事業前「自分には長所(よいところ)がある」
低評価理由の抽出語

抽出語	出現回数
自分	5
思う	4
長所	3
分かる	3

表9-4 追跡「自分には長所(よいところ)がある」
低評価理由の抽出語

抽出語	出現回数
思う	5
よい	3

<主体性・協働性について> (表10より)

事業後に実施した「他の人と活動する際に大切だと思うこと」についての調査では、「協力する/相手を思いやること/仲良く・楽しく取り組む/相手の気持ちを考える/自分を優先しない/自分の意見を言う/相手の意見を聞く/コミュニケーションをとる」という意見が多く見られた。

表10 事業後「他の人と活動するとき大切なこと」の抽出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
協力	140	他	14	優しい	10	班	6
大切	81	気持ち	13	コミュニケーション	9	力	6
思う	77	仲良く	13	聞く	8	話	6
行動	28	友だち	13	一緒に	7	話し合う	6
思いやり	26	意見	11	楽しい	7		
自分	22	考える	11	合わせる	7		
人	21	心	11	積極	7		
助け合う	18	相手	11	持つ	6		
活動	16	思いやる	10	挑戦	6		

【考察】

本調査から、セカンドスクール事業は、児童の自己肯定感、主体性、協働性の向上に効果をもたらした可能性が高いことが確認された。また、事業後だけでなく追跡調査時にもその効果が維持されていることが確認された。特に「今の自分が好きだ」は安定して高い値を示し、継続的な効果が見られた。

まず自己肯定感では、全項目で事業前より数値が上昇し、追跡調査時にも高い水準が維持されていた。質的回答からは、児童が「友だちと協力できる」「相手の気持ちを考えられる」「自分の意見を言える」といった、「他者との関係を通じた自己の良さ」に多く気付いたことが分かる。一方、自己肯定感が低い児童については、「よいところが思いつかない」など事業前後で大きな変化が見られない層が存在し、他者との葛藤や注意されることを理由とする回答も追跡調査で見られた。

主体性・協働性については、10項目のうち特に「自分で決めてやろうとしている」「自分の考えを持っている」「積極的に取り組んでいる」など主体性に関する項目で顕著に数値が上昇した。多くの項目で追跡調査時の数値も維持又は更に上昇しており、セカンドスクールの経験がその後の主体性・協働性の向上にも影響していることが考えられる。事業後の自由記述では、「協力」「思いやり」「意見を言う・聞く」「仲良く・楽しく取り組む」など、協働のために必要な態度やコミュニケーションへの理解が深まっていた。

総じて、長期集団宿泊という環境は、児童が日常生活と特別活動を通して他者との関わりを積み重ね、「自己理解を深めながら主体性や協働性を伸ばす機会」として機能していたと言えるのではないだろうかと推察する。

(2) 大学生の学び

【調査方法】

事業実施直後に、文書及び口頭で説明を行い記入依頼をして17名から回答を得た。

【質問紙】

3つの質問に無記名、自由記述で回答を求めた。1つ目は、「セカンドスクールを通して、学校教育についてご自身が学んだことを、具体的な場面やエピソードを添えて教えてください」、2つ目は、「セカンドスクールを通して、社会教育についてご自身が学んだことを、具体的な場面やエピソードを添えて教えてください」、3つ目は「児童との関わりについてご自身が考えたことや感じたことを、具体的な場面やエピソードを添えて教えてください」とした。

【結果】

自由記述の回答は、筆者が代表的な意見を選抜し、要約した上で整理した。



図6 別れのつどいの様子

① セカンドスクールを通して学んだ学校教育

(個と集団を見極めながら、学び・意欲・成長を引き出す関わり方の大切さ)

- ・統一性があるからこそ迷わずに学べるが、統一性が強いからこそ、個性が見えにくくなる場面もある。
- ・体験を通じた学びは、子供の理解と意欲を大きく後押しする。
- ・「集団」と「個」を同時に見続ける難しさがある。
- ・コミュニケーションが学級の安定と学びの深まりを支えている。
- ・一人の教師が一斉に指導することの難しさと、児童一人一人に合った指導や関わりが重要と感じた。
- ・知識を教えるだけでなく、子供たちが考えながら行動する機会を繰り返し設けることが大切。
- ・学校教育においても、知識を教えるだけでなく、子供たちが実際に考えながら行動する機会を繰り返し設けることの大切さを学んだ。

② セカンドスクールを通して学んだ社会教育

(多様な子どもが協力しながら主体性と生きる力を育むのが社会教育の魅力)

- ・自由度が高いからこそ、児童が自ら考えて主体的に動く力が身に付く。行動だけでなく姿勢や言葉にも変化が見られた。また、体験が子供の感性を大きく動かす。
- ・児童の学びが違う中で、協力して成長して、一つになっていくのが社会教育ならではの。
- ・正解がないからこそ、学びの幅も深さも無限に広がる。
- ・社会教育は、生涯にわたって役立つ力を育む場であり、子供たちが人との関わりの中で成長する場である。
- ・学校教育の枠組みだけではとらえきれない子供たちの多様な学びを実感。

③ 児童との関わりについて学んだこと

(子どもを信じて心を支えて後押しすることで、個性は強みに変わり、子どもは伸びていく)

- ・子供は「行動のサポート」より「心のサポート」を求めている。話を聞いてあげることがまずは大切。
- ・勇気をもって踏み出す一歩の後押しをすることで、子供たちは自分の力で進んでいくことができる。
- ・関わりすぎず、必要ときはしっかり支えることのバランスの難しさを通して、支援者として「導く」と「信じて任せる」両方の姿勢が求められる。

- ・子供は環境次第で驚くほど成長する。子供の成長には、認められる経験が欠かせない。
- ・特性は欠点ではなく、支え方次第の強みである。的確な支援をすることで、のびのびと個性を発揮できる。
- ・「ななめの関係」の大学生だからこそ、親にも先生にも言えない気持ちの発露が見られた。

【考察】

セカンドスクールを通して、学校教育と社会教育が、子供の成長に相互に補完し合うことを実感したようだ。また、体験活動や「ななめの関係」は子供の感性や意欲を大きく動かし、心の支えが行動の変化につながることも学びとっていた。それぞれの立場から、学校教育と社会教育への理解を深める機会となったことが分かる。

(3)保護者の学び

【調査方法】

セカンドスクール終了後、Microsoft Formsにて調査を行った。事業終了後1週間から2週間以内の回答を文書にて依頼した。110名（熊倉小29名、小田倉小33名、米小18名、羽太小1名、川谷小4名、社川小18名、近津小6名）から回答を得た。

【質問項目】

2つの質問に「はい」「いいえ」の選択式で回答を求め、選択した理由を自由記述で回答を求めた。1つ目は、「セカンドスクール中、お子さんと離れて生活することは、子育てやお子さんとの関わり方を見つめ直す機会となりましたか」、2つ目は、「セカンドスクール後、お子さんの成長や変化を感じましたか」とした。フェイスシート情報として学校名を尋ねた。

【結果】

自由記述の回答は、内容の同質性にに基づき分類し、筆者が要約したものを提示した。

表 11-1①「はい」の理由から分かる保護者の気づきや思い（表 11-2）

◎「寂しさ・心配」が最も多い

（日常の当たり前の尊さを再認識）

- ・家が静かでつまらない・姿が見えないだけで不安
- ・存在の大きさを実感した・寂しい

◎「子供の存在の大きさ・ありがたみ」を再確認

（子供がいないことで初めて気づく存在の価値）

- ・子供がいることで家が明るくなる
- ・いないと家の雰囲気がガラッと変わった
- ・普段どれだけ助けられていたか気づいた

◎「子供の自立」について考えた（促したい・意外とできたなど）

（子供に任せる、見守る大切さについての気づき）

- ・自立心を育てる良い機会だと思った
- ・意外と自分でできていて驚いた
- ・もう少し任せる時間を作りたい
- ・過保護だったかもと反省した

◎「子供との関わり方」を見直した（叱り方・話の聞き方など）

（親としての関わり方・距離感の見直し）

- ・怒りすぎていたと反省・もっと話を聞いてあげたい
- ・下の子との関わりも見直せた
- ・子供の個性を尊重したいと思った

◎「一緒にいられる時間」をもっと大切にしたい

（子どもと過ごす時間の有限さ）

- ・いつか親元を離れると思うと今を大切にしたい
- ・当たり前と一緒に過ごせる日々を大切にしたい
- ・今は忙しいけれど向き合う時間を大切にしたい

表 11-1②「いいえ」の理由

- ・セカンドスクールがなくても見つめ直すようにしている
- ・改めて見直そうとは思わなかったため
- ・見つめ直す時間がなかった
- ・兄弟がいるのでバタバタなのはかわらない
- ・大会参加のため途中で帰宅したから
- ・身支度など普段から子供がやっていたため

表11-1 保護者アンケート

質問内容	はい	いいえ
1.セカンドスクール中、お子さんと離れて生活することは、子育てやお子さんとの関わり方を見つめ直す機会となりましたか。	81%	19%
2.セカンドスクール後、お子さんの成長や変化を感じましたか。	81%	19%

表11-2 自由記述「保護者がセカンドスクール中に考えたこと」の頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	25	家	8
子供	22	毎日	7
感じる	14	一緒	7
離れる	12	心配	6
自分	11	過ごす	6
生活	11	時間	5
考える	10	出来る	5
自立	10	存在	5
今	9	大切	5
寂しい	9	長女	5



図7 小田倉小学校キャンプファイヤーの様子



- ・普段から習い事で合宿等があり離れて生活することが初めてではないため

図8 スタンツの様子

表 11-1②「はい」の理由から分かる、保護者の気づき (表 11-3)

◎生活面・自立心の大きな成長 (「自分のことを自分でやる力」を実感)

- ・荷物の整理、片付けを自分から行う・前日の準備を率先するようになった
- ・寝起きが自分でできるようになった・生活リズム (早寝早起き・時間管理) が整った
- ・家事や料理の手伝いが増えた・パジャマを畳む、洗濯物を片付ける等の習慣化
- ・スマホなしで過ごせる、計画的に生活できると気づいた

◎心の成長・気持ちの変化 (精神的な落ち着きや考え方の変化)

- ・感情表現が豊かになった・気持ちが前より大人になった
- ・受け入れる力が増えた
- ・少しの寂しさを乗り越えた経験から成長を感じた
- ・以前より落ち着いた
- ・親への感謝を言葉にしてくれるようになった
- ・当たり前の日常に価値を感じるようになった

◎友達・他者との関わりの変化 (人との付き合い方の変化)

- ・コミュニケーション力が上がった
- ・友達との距離感や関わり方を考えるようになった
- ・他校の友達ができた
- ・別れが寂しかったと話すなど感情が豊かになった
- ・相手の気持ちを考えて行動しようとするようになった
- ・リーダーシップをどうとるか考えながら行動した
- ・兄弟姉妹への関わり方が優しくなった・クラスや仲間との絆が深まった

◎新しい体験から広がった興味・意欲 (活動体験が意欲と好奇心を刺激)

- ・料理に興味を持ち、家でも手伝うようになった
- ・カレー作りをきっかけに「僕もやる！」と言うようになった
- ・ゲーム以外の楽しさを自分で発見した

◎自己肯定感の向上 (「できた」を実感)

- ・親と離れても生活できたことで自信がついた
- ・5日間をやりきった達成感・「自分でできる」という実感
- ・学校でも自分を出せるようになった
- ・積極性が増えた
- ・一人では難しいことにも挑戦する姿が増えた

表11-3 自由記述「セカンドスクール後に感じた、子供の成長や変化」の頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
自分	35	出来る	6
感じる	14	離れる	6
友だち	11	家	5
考える	9	過ごす	5
行動	9	学校	5
思う	9	関わり	5
セカンドスクール	7	持つ	5
少し	7	自立	5
成長	7	前	5
楽しい	6	大切	5
気持ち	6		

表 11-1②「いいえ」の理由：特になし

【考察】

セカンドスクールを通して子供たちが、生活面・心理面・対人関係の面で大きく成長した様子が、多くの保護者の声から伝わってきた。特に「自分のことを自分でやる力」「友達との関わり方」「気持ちの切り替え」「親への感謝」など、日常生活へもつながる子供の変化へ気づいたようだ。また、「子供に任せる、見守る大切さへの気づき」「一緒にいられる時間の大切さへの気づき」「子供との関わり方への気づき」など、子供と離れたからこそ子供への思いを深め、子育ての内省をしたことが分かる。

集団生活をやりきった経験は、子供たちの自信となり、今後の学校生活にも良い影響を与えるものだと考えられる。また、セカンドスクールが、保護者にとって、子供への関わり方を見つめ直し、子供の成長や変化に気付く機会となっていたと言えるのではないだろうか。

(4) 教職員の学び

【調査方法】

追跡調査として、セカンドスクール終了後に文書及び口頭で調査依頼をした。事業実施後1週間後の記入又はOneDriveへの入力を依頼して、4名から回答を得た。

【質問紙】



図9 焼き板の様子



図10 キャンプファイヤーの練習の様子

3つの質問に「はい」「いいえ」の選択式で回答を求め、「はい」の理由等を自由記述で回答を求めた。1つ目は、「セカンドスクールを通して、児童理解が深まりましたか」、2つ目は、「セカンドスクールをとおして、児童の新たな一面に気付くことができましたか」、3つ目は、「セカンドスクールのプログラムの中で、ご自身が体験活動を指導する上で参考になったプログラムはありましたか」とした。フェイスシート情報は求めなかった。

【結果】

自由記述の回答は、内容の同質性にに基づき分類し、筆者が要約したものを提示した。

◎深まった児童理解

教室では見られない姿の発見

- ・普段の学校生活では見せない行動や表情が見られた
- ・主体性が育った子がいた
- ・今までと違う環境の中で学ぶことで、一人一人の特性がより表れた

協力して課題に向かう姿・成長の兆し

- ・子供たちが自分たちで相談して解決しようと協力する姿や一人一人の活躍を見ることができた

◎児童の新たな一面への気づき

主体性・判断力の発見

- ・自分で判断して行動できる子が意外と多い・班長等の役割を責任をもって果たそうとする姿

コミュニケーション面での新たな姿

- ・手のかかる子が一番最初に話しかけていた・スタッフや他校の児童と積極的に関わり合う姿が見られた
- ・学校では少ししか話さない児童が、いつもよりもたくさん自分から話す姿が見られた

◎指導するうえで参考になったプログラム

ボッチャ体験（指導の視点で得られた学び）

- ・子供たちが自分たちでチームを探し、主体的にプレイし始める姿が見られた。
- ・手順を教えすぎず、「任せる時間」が子供の主体性を育てるという気づきを得られた。

野外炊飯（指導や安全管理の観点からの学び）

- ・役割分担の重要性を、実体験として子供に伝えられる活動であると改めて感じた。
- ・事前準備が安全でスムーズな活動につながることを実感した。

なすかしの森トレッキング（教科との関連）

- ・自然を見る視点を大切に、教科の学習へしっかりとつなげていた。

【考察】

本事業は、子供たちを日常とは異なる環境でじっくり見ることができるとなり、児童理解を大きく深める場となったようだ。教室では気付かなかった一人ひとりの特性や成長を知ることができ、今後の学級経営や指導に大きく活かせる学びとなったのではないだろうか。

自然体験・集団生活・役割活動など、環境の変化が子供たちの新たな一面を引き出し、今後の学級経営や個別支援に大きく活かせる気づきを得られたものとする。

(5) 施設職員の学び

【調査方法】

セカンドスクール終了後、追跡調査としてMicrosoft Formsにて調査を行った。事業終了後1か月以内の回答をお願いして、4名から回答を得た。

【質問項目】

4つの質問に自由記述で回答を求めた。1つ目は、「セカンドスクールを通して、学校教育についてご自身が学んだことを教えてください」、2つ目は、「児童理解を深めるにあたり、児童と関わることで、ご自身が学んだことを教えてください」、3つ目は、「セカンドスクールを通して、ご自身が学んだことや感じたことを教えてください」、4つ目は、「セカンドスクールの経験を、今後の業務にどのように生かしていきたいか教えてください」とした。フェイスシート情報として主担当か副担当かを尋ねた。

【結果】

自由記述の回答は、筆者が代表的な意見を選抜し、要約した上で整理した。

① 学校教育について学んだこと（環境や大人の関わりの重要性）

- ・学校教育では十分に提供できない分野が存在する。また、これを社会教育であれば補填できる。
- ・学校では個性が生かされない子も、体験活動を通して生き生きと自己表現できている姿が見られた。
- ・教職員の言動や態度が、よくも悪くも子供たちに影響を与えている。

② 児童と関わることで学んだこと（助けすぎず、受け止める）

質問内容	はい	いいえ
①セカンドスクールを通して、児童理解が深まりましたか。	100.0%	0.0%
②セカンドスクールを通して、児童の新たな一面に気付くことができましたか。	100.0%	0.0%
③セカンドスクールのプログラムの中で、ご自身が体験活動を指導するうえで参考になったプログラムはありましたか。	100.0%	0.0%

- ・5年生にさせるには難しいと考えて手を差し伸べてしまうことで、成長の機会を奪ってしまう場面がある。
 - ・距離感や寄り添いについて。ありのままの姿を受け止めることで、子供たちが心を開いていく。
- ③ セカンドスクールを通して学んだことや感じたこと（長期宿泊は子供の大きな成長を育む）
- ・分かりやすい説明や指導は、マニュアルどおりに進めるだけでなく、その時々の子童の様子や当日の天候等を鑑みて、目の前の児童に伝えようと努めることが重要であり、また事前の入念な準備が欠かせないと感じた。加えて、体験活動は体験とは異なり、一つ一つの体験プログラムには必ず達成すべき教育上の目的があるものと学んだ。
 - ・小学生が親元を1週間離れ長期で集団宿泊をすることには大きな意義があり、子供たちにとって大きな成長の場であり、子供たちが様々な人と関わることでよりよく成長していく姿が見えた。大人に関わってもらえることを待っている子が多い。長期集団宿泊活動が児童の成長に与える影響はとても大きいと感じた。
- ④ 経験を今後の業務にどのように生かしていくか（学びの継続と関係者との連携）
- ・トレッキングでの研修指導員との引率経験は、那須甲子地域の森林に関する知識や安全管理、単元に関する理解度等、学びが多いものだった。これは普段の業務にも直結する。継続的に知見の獲得に努めたい。
 - ・本事業を実施するにあたり、ボランティアの力が必要である。ボランティアの育成に力を入れるとともに、社会教育実習生への事前指導、研修指導員との連携など、先を見据えた事業運営の大切さを改めて感じた。

【考察】

セカンドスクールでの経験は、児童の成長を多面的に支えるとともに、職員にとっても学校教育や児童理解を深める学びの多い場であった。特に、副担当を務めた事業経験の浅い職員にとって、児童理解を深め、自身の指導力を高める機会となった。今後は、プログラムの目的と内容のつながりをより意識していくことや、多様な背景をもつ子供たちにも寄り添いながら柔軟に対応できる指導体制を整えていくことが必要である。

4 成果と課題

【成果】

当事業は、参加児童のみならず教員・保護者・大学生（教育支援スタッフ）・施設職員が相互に学び合う機会となることを目指して実施した。調査結果からも、事業を通して、それぞれの視点から学びを深めたことが分かる。

特に、今年度のセカンドスクールでは、実施3期間の内2期間で、小学校3校が合同で実施するプログラムを設定した。他校の児童との交流では、初めて会う仲間と一緒に活動する中で、自然に声をかけ合ったり協力し合ったりする姿が生まれ、新しい友達づくりのきっかけになった。また、1日の終わりに各校で振り返りの時間を設定した。全体やグループで意見を交わすことで、自分とは違う考えに気付いたり、自分の思いを言葉にして伝えたりすることにつながった。こうした経験を通して、人との関わりを楽しみながら、自分の考えを大切にしようとする姿が育まれたと考える。また、児童が、他校の児童の姿から自分たちを見つめ直す機会になっただけでなく、経験差のある教職員が、互いの学級経営について見直したり相談し合ったりと、教職員間の交流も図ることもできた。

【課題】

自己肯定感が低い児童に対して、良さを言葉にできるよう支援したり、小さな成功体験を意図的に積める活動を取り入れたりすることがより必要であったと考える。また、「自身の自己肯定感の変容」について、事業後すぐの調査でも事業前/追跡調査時と同様の設問を入れることで、児童心理の変化の流れをより正確に把握できると考える。自己肯定感を高めるための児童の実態把握を事前に十分に行うために、更に学校との連携を深めていきたい。

【参考文献】

- 1) 国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等に関する意識調査(令和4年度調査)」2024年 p.191

2) 河村明和「中学生における主体的学習態度尺度の作成」2020年

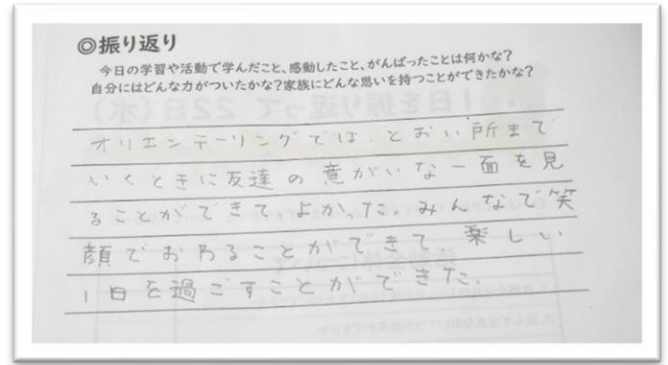
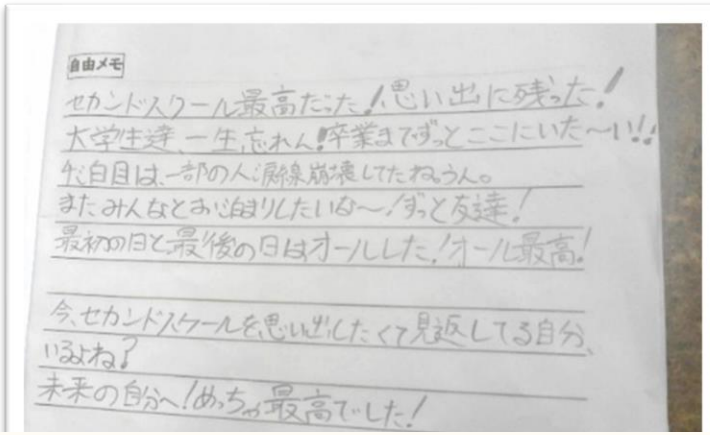


図12 児童の振り返り②

図11 児童の振り返り①

5. なすかしの森 セカンドスクールの歩み

- 2007年（平成19年） 西郷村立羽太小学校でセカンドスクールが初めて試行。
- 2008年（平成20年） 羽太小に加え、西郷村立米小学校と江戸川区立小松川第二小学校が参加。
セカンドスクール実践フォーラムを開催、妙高・乗鞍・信州高遠・那須甲子が実践報告。
- 2009年（平成21年） 「教育臨床のためのプログラム開発研究会」スタート。
- 2011年（平成23年） 3月 東日本大震災
西郷村立小学校5校にて4泊5日でセカンドスクールを実施。
羽太小は6年生、その他の小学校は5年生が参加。IKR調査を実施。
- 2013年（平成25年） 本年度より、白河市立表郷小学校がセカンドスクールに参加。
羽太小では5年生、6年生の2学年が参加。
- 2015年（平成27年） 従前の6校に加え、棚倉町立社川小・高野小・近津小・山岡小が実施。
- 2017年（平成29年） なすかしの森 セカンドスクール「五者の育ちの場」のコンセプトが明確になる。
- 2019年（令和元年） 「教科等に関連付けた体験活動プログラム」通して単元とプログラムを整理。
- 2020年（令和2年） 「小学校学習指導要領」改訂、体験活動の充実と開かれた教育課程に言及。
本年度より西郷村5校、棚倉町3校の合計8校で実施。
- 2021年（令和3年） 新型コロナウイルスの対応のため全校にて保護者会での感染防止対応の説明に加え
教育支援スタッフにワクチン接種と抗原検査を実施。一部の小学校は1泊2日で実施。
- 2022年（令和4年） 西郷村立川谷小学校を除く西郷村4校、棚倉町3校の合計7校で実施。
- 2023年（令和5年） 落雷停電で事業中止。棚倉町3校は国立磐梯青少年交流の家にて1泊2日で実施。
- 2024年（令和6年） 西郷村4校、棚倉町3校に新たに那須町1校を加え、合計8校で実施。
- 2025年（令和7年） 西郷村5校、棚倉町2校の合計7校で実施。米小学校・近津小学校・社川小学校、熊倉小学校・羽太小学校・川谷小学校がそれぞれ3校同時開催



